第 13 回大会報告記

橋　本　信　子

13回目となる学会は川崎医療福祉大学を会場に10月29日（土曜日）に開催された。穏やかな秋の一日だったが、早朝から準備で走り回っていた私には汗ばむほど暖かく感じられた。10時より2階の会議室において4名の理事の出席で理事会が開かれた。連絡の手違いのためポール・ハラ氏の出席が叶わなかったのは残念であった。11時から会場を1階に移して総会が開かれた。平井法会長の挨拶に続き、榎本眞理子副会長より理事会報告があり、その中で、2012年の学会の開催校候補として挙がっている慶応義塾大学、一橋大学に開催の可能性を打診すること、ニューズレターを充実させること、理事である植木研介氏の退会に伴って井上澄子氏に理事への就任を依頼すること、特別講演の講師の経費については、交通費は実費、宿泊は一泊の上限が12000円で2泊までとすることなどの報告と、かねてから懸案であったホームページについては、ハラ氏より提案されている3案のいずれを採択するかは執行部に一任してほしい旨の要望があり、了承された。岡野浩史氏より事務局の運営への協力の要請と会計報告、および予算案の提示があり、了承された。総会後、用意された昼食を食べながらしばらく歓談の時を過ごしたのち、午後1時から、20名近い参加者を得て、3題の研究発表が

行われた。中窪靖氏の司会で石本弘子氏は、「『ユニコーン』における不思議な魅力を持つデニスについての考察」と題して、デニスに焦点をあてた発表をされた。次に、川本玲子氏の司会で中西ウェンディ氏が、「The Dual Nature of *The Bell*」と題して、作中の対比的なものについて深く考察した発表をされた。最後に小野順子氏の司会で室谷洋三氏が「アイリス・マードックと宮沢賢治」と題し、タゴールが両者を繋いでいるとして、3者の関連性を明らかにされた。発表に先立って、室谷氏は、7月の夫人の葬儀の際の学会からの生花と弔電、会員からの弔意に対して謝辞を述べられた。休憩を挟んで特別講演があり、平井氏の司会で近藤耕人氏が「ベケットとマードック—水と言語—」と題して、水と言語を手がかりに、ディケンズ、ジョイス、ベケット、マードックの作品を取り上げて論じられた。

懇親会は岡山駅近くの「ホテルグランヴィア岡山」で持たれた。研究発表に参加されたほぼ全員の方が出席してくださったのは嬉しいことだった。1年ぶりに顔を合わせる懐かしさと美味しい料理に、あちこちで談笑の輪が広がった。楽しく過ごしているうちにお開きの時となり、来年、東京での再会を約して散会した。

春には退職をすることもあり、事務局を岡野氏に引き継いでいただいた。学会場をお引き受け出来るのも最後であるし、ぜひ発祥の地でというお心遣いもあって、今回私の大学で開催させていただいた。力不足のまま長年事務局を担当して、行き届かない点が多く、ご迷惑をおかけするばかりだったような気がしてならない。紙面を借りてお詫びしたい。先行き不安な状態で継続が危ぶまれるようなこともあったが、いろいろな方に助けていただいて、何とか続けられたことを心から感謝している。事務的なことに時間を取られて苦慮したこともあったが、今となってはそれも懐かしく思い出される。戯曲 *The One Alone* の中で、マードックは天使に、“With children hope returns/ Always, and the world/ Begins again./ What you hear is the sound of the future.”と語らせている。「children」という語は「会員の皆様」と置き換えなければいけないが、私も同じような気持ちでいて、学会の未来に希望を持っている。学会の今後の発展を願いながら、今は少し肩の荷を降ろすことが出来てほっとしている。